



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの 生活実践と自己創造に関する民族誌的研究

著者	中野 歩美
URL	http://hdl.handle.net/10236/00027283

氏 名	中 野 歩 美
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（社会学）
学 位 記 番 号	甲社第67号（文部科学省への報告番号甲第655号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2018年3月2日
学 位 論 文 題 目	北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの生活実践と自己創造に関する民族誌的研究
論文審査委員	（主査） 教 授 関 根 康 正 （副査） 教 授 古 川 彰 三 尾 稔（国立民族学博物館グローバル現象研究部教授）

論 文 内 容 の 要 旨

中野歩美氏による学位申請論文「北西インド・タール砂漠地域に暮らすジョーギーの生活実践と自己創造に関する民族誌的研究」の要旨は、以下のとおりである。

本論文は、北西インド・ラージャスターン州の西部に広がるタール砂漠地域に暮らす人びとのあいだで、「移動民」ないしは「物乞いカースト」として知られるジョーギーを対象に、彼らの生活実践とそこから立ち上がる内在的な自己認識の動態を明らかにする試みである。

論文は、序章と、本論（第一章から第六章）、結章の全八章からなる。序章では、既存の先行研究の問題点として、ジョーギーに対する（1）（上位）カースト範疇中心的な視座の限界、（2）移動／定住二元論に立脚した議論の限界という二点が指摘される。両者に共通するのは、どちらも中心・周縁という非対称な二元論的範疇構造を有しており、支配的な言説空間を形成しているという点である。そこで本論では、ジョーギーの人びとの視点に寄り添いながら、実際に彼らによって生きられる世界の記述を目指す。その視座は、ハイデガーの建築論に触発されたインゴルドの提唱する「住まう視点」と共鳴するものである。以下で、各章の議論の要点を簡潔に示す。

第一章では、「カースト」という概念が英国植民地期に創出され、次第にローカルな人びとのあいだにまで浸透し実体化していったというカーストの客体化の議論を踏まえて、ジョーギーの人びとがいかに「カースト」として範疇化され、客体化されていったのかを、主に英国植民地期のセンサスと地誌から検証する。特筆すべき点は、同じナート派という宗教セクトの信者によって構成されるジョーギーとカールベリヤーが、範疇化の過程で、前者はOBC（「その他の後進階級」）、後者はSC（「指定カースト」）へと分岐していったことである。現在では、両者は、集団範疇と集団表象の両方において断絶した存在として現地で見なされるようになっている。

ここで明らかにされた「上からの集団範疇と集団表象」の歴史を踏まえた上で、第二章からは、現実世界を生きるジョーギーたちのいわば「下からの生活実践」を現地調査のデータから明らかにしていく。

第二章では、現地のジョーギーたちの基本的な生活状況について、衣食住をめぐる現在の状況を概観する。特筆すべき点として、彼らが「定住化」した後も、短期的・長期的に住まいの場を移していることがあげられる。ジョーギーにとって「定住後」の暮らしとは、移動（野営）から定住（小屋・家）へという定住／移動二元論が想定する単線的な変化として示せるようなものではなく、むしろその両方を必要に応じて用いて

いることが明らかとなる。

第三章では、ジョーギーたちの生計手段の変化について検討し、特に移動生活と結びついてきたであろう彼らの「異人性」が、「定住後」の世界にどのような形で適用されているのかについて考察する。現在は、多くのジョーギー男性が肉体労働に従事しており、近代的な賃金労働が主流となっている。その一方で、物乞いや毒抜きや虫の吸出しといった「異人性」によるところの大きかったジョーギーたちの「定住化」以前の生計手段は、「定住化」によって世俗化したものの、顔が知れることで起こる世俗化を避けるために定住先の村から離れた場所でおこなったり、あるいは顔見知りの村人に対しておこなわれる民間療法へと変化させることによって、「定住後」の生活世界に適應する形で再文脈化されている様子が浮かび上がる。つまり、ここでも移動性と結びついた「異人性」が「定住化」によって直ちに消滅するわけではないことが明らかになる。

第四章では、先の「異人性」とも関係するジョーギーの信仰実践について考察する。そこでは、彼らが備えている集団的特性の二面性が明らかとなる。つまり現地のジョーギーたちは、一方で非定住的な生活様式、物乞いや呪術的な実践、サマーディーという埋葬方法等に見出されるような、ナート派の信者という集団的特性を明白に有しながら、他方でクラン神信仰にもとづく親族集団として規定されるような慣習的实践を数多くおこなっている。このようなハイブリッドな信仰実践の在り方からは、ジョーギーたちの「生の方法＝住まい方」の基底に、移動時代も「定住」後も変わらぬ、定住村にとらわれない彼らの複雑で重層的な親族ネットワークがあるということを読み取れる。換言すれば、当地のジョーギーたちは親族の紐帯に根を張るような生き方をしており、それを揺るぎない生の拠り所として持ち合わせながら、ナート派という宗教セクトの価値を活用することでナート派における周縁と村社会における周縁という二重の周縁的な世界を独自の伝統的文化基盤の上に接合し、自分たちの生きる地平を切り開いてきたといえる。

第五章では、そうした彼らの生活の基底にあるものとしての親族ネットワークが構築・維持・再生産されていくメカニズムを探る。北インドでは、ブラーマンの価値体系にもとづいた持参財婚を頂点におき、婚資婚を底辺に置くような序列的な婚姻認識が、村人や、彼らを調査する研究者のあいだでも多かれ少なかれ既定事実であるかのように見なされ、共有されてきた。その視点からは、ジョーギーたちのあいだで主流となっている婚資婚は、娘の婚出によって対価を受け取る商業的な取引とされ、劣位の価値が付与されている。しかし、現実のジョーギーたちの婚姻実践に注目してみると、彼らのあいだでは、婚資の贈与に対して、商業的な取引という否定的な表象とは異なる価値が付与されていることが発見される。つまり彼らのあいだで婚約から結婚までの長期に渡って定期的にやり取りされる婚資（サンバル）の実践は、娘と婚資の即物的取引ではなく、むしろ婚約から結婚までの継続的な姻戚間の対面の場を創出するものであり、その場を通じて親同士の協力関係や信頼関係が生成され、時間をかけてそれを熟成していくことに主眼がある。ここから持参財婚と婚資婚とが依拠する価値論理の違いが次のように提示される。

英国植民地期にブラーマンの理念を外套としながら地位上昇をはかるための戦略として発展してきた近代的な持参財婚は、中心・周縁構造を創り出し自らを中心に置くことによって価値を高めようとする固定的な<序列化の論理>に貫かれている婚姻形式といえる。それに対してジョーギーたちが正統な婚姻形式として慣習的におこなってきた婚資婚は、差異の創出と回復のダイナミズムの過程において、多くの人を巻き込みながら絶え間ないつながりを生成することで、縦の序列関係ではなく横の紐帯や平等な関係を志向する<均衡化の論理>に支えられたものである。

ここまでの議論を踏まえて、第六章では、1990年代後半から「DNT（英国植民地期にクリミナル・トライブスや移動民とされてきた人びと）」という上からの集団範疇が新たに創出されつつある状況に注目する。そして、それと関連したローカル NGO の活動と現地のジョーギーの自己認識について検討を加える。「DNT」という新たな優遇政策の枠組みを立ち上げようとする行政主体の議論は、ここでも移動／定住の二元論に依

扱って進められており、実際に州政府が作成した「DNT」のリストには、ジョーギー自身の自己認識とは相容れない新たな下位区分が多数記載されている。現地の NGO は、そうした行政の状況を踏まえて活動を展開し、調査地のジョーギーたちを、OBC よりも手厚い保護を受けられる SC に範疇化されたカールベリヤーに戦略的に包摂させようとする様子が描かれる。しかし当事者であるはずの現地のジョーギーたちは、そうした NGO の主張に影響を受けつつも、完全には自分たちをカールベリヤーに同定しようとしていないことが明らかとなる。しかし、このようにカールベリヤーになりきらない現地のジョーギーたちの姿を、自ら声をあげることでできないサバルタンとしたり、社会的弱者のなかの更なる弱者と見なすことは適切ではない。なぜなら彼らの自己認識は、第五章で見てきたような、連綿と紡がれている重層的な親族ネットワークによって生成された下からの「われわれ」意識という基底的な支柱によって基礎づけられているからである。それは、「移動」か「定住」か、あるいは「ジョーギー」か「カールベリヤー」か、というような一枚岩的な同一性や一貫性を前提とした範疇化によって引かれた境界線に頓着せずに乗り越えていくようなものであり、上から押し付けられた集団範疇や集団表象によって分断されたり揺らいでしまうような脆いものではない。そうした親族ネットワークに根ざした揺るぎない自己認識があるがゆえに、彼らはたとえ上からの集団表象や集団範疇の押し付けがあったとしても、実際にはいとも簡単にその境界を無視したり、跨いだり、往復しながら縦横無尽に絶えずその集団範疇を攪乱していくのだ。この意味で、彼らの「住まう＝生きる」という実践は、設計図に基づいて建てられた建造物に人びとを入れ込むような「建てる視点」において把握されるようなものではなく、＜均衡化の論理＞による絶え間ない自己創造と言い表せるような「住まう視点」から理解されるものなのである。そこでは、移動／定住二元論も上位カースト中心的な範疇化も正確な現実理解のための論理としては限界があることを露呈することになる。

結章では、本論文での議論を総括し、議論の要として論じられてきた、個々人とそれを埋め込んでいる集団全体とが動態的に織り成すジョーギーたちの親族ネットワークという基盤に支えられた生成的な自己認識が、G. ドゥルーズの「差異を前提とした反復」という差異の哲学にも接続する可能性を持っていることが示される。それにより、本論文の有する議論の潜在的な射程の広がりが見えわたる。

論文審査結果の要旨

中野氏が提出した博士学位申請論文は、南アジア社会の人類学・社会学研究の世界で、以下のような大きく言って三つの領域において新たなユニークな貢献をなすものである。

第一に、北インドのラージャスターン地域のタール砂漠に暮らす物乞い移動民ジョーギー（現在は「定住化」している）の生活文化の実態について長期の過酷なフィールドワークを通じて詳細な知見をもたらしたことに余人を持って代え難い貢献がある。この地域の移動民の研究蓄積はもともと限られており、しかもその生活実態を現地に身を置いて明らかにした業績はほぼ皆無に近い。そのような研究の空白を埋める仕事を長期フィールドワークを敢行して達成した。その点の稀有なオリジナリティーはまず持って特筆されなければならない。

第二に、この地域のジョーギーは1970年代以降に移動生活から「定住化」を始めたが、その実態は、移動から定住へという単線的なものではなく、定住後も野営と移動を排除しない柔軟な住み方の形をとっている。このような従来の定住・移動二元論では説明できない住まい方から、動くこと、動かないことを単に対立的に捉えるのではない、彼らの内在的な空間理解が求められた。本論文はそのことを、T. インゴルドの概念である周囲との相互作用の中でその都度、空間を生成するという「住まう視点」と共鳴させながら、ジョーギーのその時の今を生きる過程的な視座を提示した。そのような指摘自体が重要な貢献であるが、それだけでなく、その移動と定住を含み込むような融通性の高い住まい方はいかにして可能なのか、どのように維持

されているのか、という、第三点目に連なる大きな問いへと誘い、解明したことがさらなる大きな貢献となっている。

第三には、中野氏の本論文は南アジア研究において桎梏になっている二つの研究視点の限界の突破に向けられている。南アジアが英国によって植民地支配されていた時代に進められた上からの近代化がもたらした社会範疇化と序列化、すなわち、その内実の一つがブラーマンの視座からの「伝統の創造」によるカースト階層社会の範疇化、そしてもう一つが近代定住化思想の浸透であった。つまり、研究視点のバイアスと限界は、インド社会が多くの社会範疇からなる固定的な序列社会へと改変されたことに端を発するものであった。そのことは植民地状況からの独立後も継承され、現地の支配イデオロギーとなって、現地の人びととそれを研究する者の思考を同時に縛ってきた。そうした研究者が現地社会を把握し表象するのであるから、そうしたバイアスの再生産に加担することになり、ますます社会の周辺や底辺の実態は見えにくくなっていった。こうして、カースト範疇中心主義、もうひとつの定住中心主義の壁が厚くなっていったのである。これらのいわば「上から」の見方ではしばしば現地社会に生きる人びとの目線、とりわけその社会で周辺化された人々の内在的な視野は誤解されたまま表象され、またはしばしば実態は無視される。このような研究の窮状に果敢に挑戦したことが、本論文の眼目である。

特にジョーギーのような周縁化された人々が行う婚資婚の実践に注目することで持参財婚中心的な価値づけの「序列化の論理」では解き明かせない、ジョーギー独自の内在的な価値世界を「均衡化の論理」という概念化で把握し、その独自の地平を描ききったのである。固定的な非対称（カースト的地位の固定的差異）が前者の論理を支えるとしたら、後者は平等的な父系親族と姻戚関係の織り成す親族ネットワークの体現するつながりの絶えざる構築の論理なのである。均衡化に向けて差異を回復するためのプロセス創出のためにその起点として内部につくる一時的非対称は、「序列化の論理」における固定的非対称とは全く異なるものである。

このような本論文の成果は、現地社会と研究世界に見られる上からのバイアスというポストコロニアル状況に対して下からの現実認識を突きつけ修正を迫るものである。と同時に、ネオリベリズムがもたらす社会的流動性、すなわち新たなモビリティの高まりに対しても重大な解釈変更を提示している。すなわち、グローバリズムに適応するためにジプシー・ダンサーに変身するカールペリヤーのような更なる「カースト化」による対応ばかりがあるのではなく、多くのジョーギーにおいては、むしろ本来からその集団文化に内蔵されていた、差異と反復という基層的なモビリティを胚胎・産出する親族ネットワークという文化的仕掛けを維持し強化していくという、外からは見えにくいが確かな生の基盤で、外的変動に対応しているのである。そのことを本論文はきわめて具体的に説得的に明らかにした。これはポストコロニアル研究としても優れ、またモビリティ論への新視角の提示という点でもきわめて重要な貢献と言える。

中野氏の本論文はジョーギーの生活世界に浸り込んだことによって見出された成果であるから、ある意味で以下にいくつか指摘することは現段階では過剰な要求であるが、今後の課題の形で示しておきたい。

1) 研究対象のジョーギーが自らのルーツとして語りその埋葬方法を守っている宗教セクトはナート派であるが、そのナート派の行者（バクト）と彼らの関係については、いくつか事例は提供されているものの、その関係の全体像はどのようになっているのかさらに知りたいところである。北インドに広く認められる宗教セクトであるから各地の僧院と世俗ジョーギーとの接触の仕方をより詳しく知ることができるならば、物乞いを生業にしてきたジョーギーにとっての「施し」をえる行為の意味がより明確に確定できるのではないかと。その施しの基本には未知の異人への歓待の義務といった民俗的呪的行為や宗教的聖性への喜捨の意味があるであろうが、審査委員から G. ラヘジャが民族誌で描いたような定住村における贈り物（ダーン）のやりとりやケガレの解消を認めるような社会関係は、研究対象にした世俗ジョーギーの世界では全く存在しないのだろうかという質問が出された。これは今後の課題である。

2) 上記の点は、すぐに、「定住化」政策の中でジョーギーたちが定住したのが村の中ではなく村の外れである事実とも深く関わることであって、論文からは、村人とそのような定住ジョーギーの相互作用は描出されてはいるが、さらに突っ込んだ両者の社会関係は十分には明らかにされていない。また、村人とジョーギーは克蘭神信仰を共有しているとされるが、村人の具体的な克蘭神信仰については記述がないために、両者の連続性と断絶性がもう一つ明確にならないところが残る。というのは、父系血族のまとまりを維持している克蘭神信仰の縦軸においてはジョーギーと村人とは共有性があるのに、婚姻形式という親族関係の横軸については村人の持参財婚に対してジョーギーは婚資婚を行うという相違が見られる。ここにおいて、予想されるのは両者の間での土地に対するパースペクティヴに相違が見られるであろうことである。そうすると、克蘭神信仰の巡礼サイトという土地は両者にはどのような景観の差異として内面化されているのであろうか。それについて考察することは、きわめて興味深い課題である。

3) 研究対象にしたジョーギーの歴史的成立過程を直接の史料によって追うことは不可能に近い研究課題であることは研究者の間での了解事項であるが、すこしでも様々な傍証を用いて、こうした物乞い遊動民が誕生するケースを明らかにできるならば、インドの他の地域の移動民の系譜とも比較できる重要な研究になるであろうし、それは、本論文が明らかにした二層のモビリティ（二元論的固定性を手放さない社会流動性のモビリティと内的ダイナミズムを生きる基層的モビリティ）の分岐や重層のリアリティを解明する手がかりになるであろう。

以上、本審査委員会は、本学位申請論文の内容と研究活動を慎重に審査し、2018年2月20日に行われた公開の最終審査口頭試問の結果をも加味して判断し、中野歩美氏は博士（社会学）の学位を授与するのにふさわしいとの結論を得たので、ここに報告する。